

岩手縣に於ける地的胴体部の地誌學的研究

横 田 幸 八

一 緒 言

岩手大學學藝學部研究年報第一卷（一九四九年）に筆者が岩手縣の南北性と東西性なる小論を發表したが、その對比を明確ならしめた胴体地域を對象として、地誌學的に地的性格を把握せんとするのが本論の主眼である。

抑々何事によらず、個性を把握する場合にはまづその範圍を決定する事が先決條件である、その範圍は線にて示される場合が多い。然し地的空間に於いては面なる場合が普通である。その面でもフロンチアよりバウンダリーである。このバウンダリーが廣ければ廣いほど兩端の性格差が著しくなる。岩手縣に於ては東西並南北の地域差が明確に把握される所以のものは、このバウンダリーが相當廣くあるといふことと、天與の自然構造差と、現經濟人の經營差とが著しい個性をもつてゐるからである。そこで岩手縣の南北差、東西差、を必然的に附與した地域を地的胴体部として考察の對象としたのである。

二 地的胴体部の範圍と區分

岩手縣の地理學的區分、即ち、地理區を筆者は次の六つに區分してゐる。

- (一) 北上川低地（中央低地）
- (二) 北上高原
- (三) 東部海岸
- (四) 西部山地
- (五) 南部地域
- (六) 北部地域

（この區分に關する理念と方法は年報第一卷八一頁に述べてある）
以上の地域のうち本論の對象とせる地的胴体部といふのは(一)と(二)、即ち第一圖地理的區分圖に示す處である。

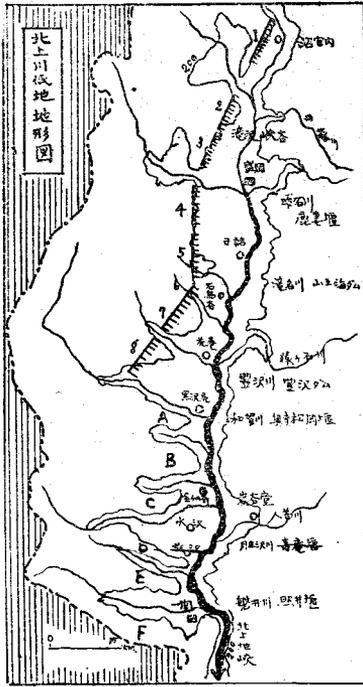
地的胴体部の(一)は北上川本流域であり(二)は北上高原の中部である。北上川は七時雨火山横列が、北上高原に迫る奥中山峠（四二七米）に源を發して宮城縣の石巻灣に注ぐ長さ二四三籽で日本第五位、流域面積では一、〇二三籽で第三位を占める。この河の宮城縣分は五九籽であるから約八〇％は、岩手縣に屬するので北上川は岩手縣に屬するといふことが出来る。この河はコンセクエントの流路を辿つてゐるの

宮城縣に屬する、北上高原の總面積は一万五千方籽であるが、そのうち九〇%が岩手縣に屬するのである。

岩手縣は總面積の八四%が山地である。そのうち六一%を北上高原が占めているのであるから、岩手縣は又北上高原より成るといつても誤りではない。この山地の東部は太平洋で支脈が海にせまり、南は沈降の鋸齒狀海岸となり、北部は斷層の隆起海岸である。それは胴体部のブロック運動によつて運命づけられているのである。

北上高原は秩父古生層が大部分で上部には紡錘虫石灰岩、中部には海百合石灰岩、下部には無化石石灰岩等があつて、その厚さか一、六六〇余米にも及ぶ堆積層である。生成が古いから準平原面にモナードノ

第二圖



ックが点綴し、ブロックの活動がバイラシーの現象を示す複雑な地形を呈している。この高原を大きくわけると北部と南部とに大別出来る。

岩手縣に於ける胴体部といふのは、東西・南北の地域を除いた、中央低地帯と北上高原地域とをいうのである。

三 地的胴体部の景觀

北上川本流灌漑域八四籽間の景觀を三つに區分することが出来る。北部は灌漑峽谷以北で山林・原野の五六%が卓越し中部斷層崖下を占める灌漑峽谷・鬼柳丘陵間は四〇%の水田、三十三%の畑地、即ち耕地七十三%が卓越し、南部は丘陵と扇狀地の連續に支配されて水田三八%、畑地二四%、山林二九%、原野九%であるから、耕地と林野の混合地域である。即ち、北部は、山林・中部は耕地、南部は混合といふ景觀を呈しているといふことが出来る。中部の七三%、南部の六二%の耕地を有するこの地は、岩手縣の穀倉地域といふことが出来る。

岩手縣に於ける北上高原は閑伊川、築川の線を界として南部高原、北部高原と區分する、この兩者は地形的に著しい個性をもつ、即ち、第三圖に示すように北部は高原性であり、南部は盆地性である。これは北上高原の主副分水嶺の在方、即ち、構造による排列と形態の差異に起因するものである。

北上高原の主峯早池峯山(一、九一四米)を中心として西に、中岳(一、六七九米)鶏頭山(一、四四五米)毛無森(一、四二七米)權現山(八二八米)東に、高檜山(一、一六七米)彌々子森(一、一〇米)等の一列とその南に一段低く並ぶ、藥師岳(一、六一五米)を中心し西端、高倉山(五四六米)東に妙澤山(一、一〇三米)の一

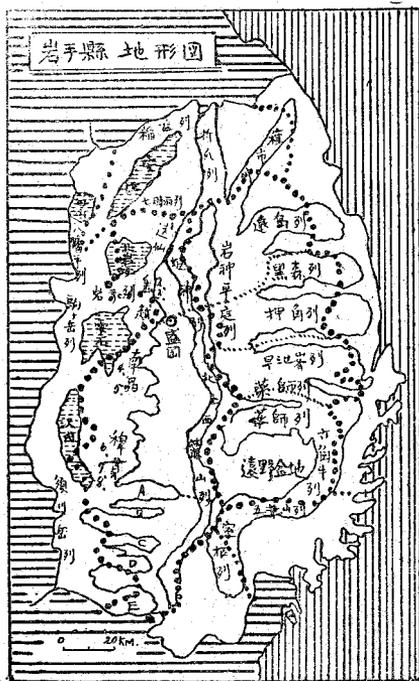
列とが東西に平行して並ぶ。早池峯列の北には西から東に、高森山（一、二二〇米）青松葉山（一、三六六米）害鷹森（一、三六〇米）龜ヶ森（一、二一〇米、の定高性の山々が並ぶ、この山岳列を越える難所を押角峠（六四四米）というのであるから、この一列を押角列と稱することにする（現在は宮古市の西方茂市より宇津野まで汽車が通じ長さ五八〇米のトンネルが出来ている）。即ち、薬師列、早池峯列、押角列の三列が北上高原の中央部高原となるのである。この早池峯・押角二列間の斷崖谷を東流しているのが、閉伊川で長さ八八籽、流域面積九四五方籽をもち宮古灣に注ぐ。この河は盛岡市域に境する區境峠（七二二米）に發して古生層の美しい懸崖を縫え飛沫を見せているので盛山溪として紹介されている。山田線又之に沿ふ。この河道は斷崖谷であつて、これを境として北と南との地形を異にする。北部は押角列の北に黒森山を中心とする黒森列（西より樺山（一、二一三米）穴目ヶ岳（一、一六八）黒森山（一、一〇七米）野邊山（九一六米）とその北に遠島岳を中心とする遠島列（西より遠別岳（一、二四一米）安家岳（一、二三六米）遠島岳（一、二六三米）高森（七〇二米）との三列が東西に平行して走つている。これ等の三列をつなぐ西には南から岩神山（一、一〇三米）阿部館山（一、二一八米）三菓子岳山（一、一八二米）平庭岳（一、〇六〇米）の山々が連らなる。これを岩神・平庭列と稱することにする。この岩神・平庭列と殆んど平行して南北に走り北上川に肉迫聳立する一列がある。これが姫神山（一、一二五米）と折爪岳（九五二米）を結ぶ姫神・折爪列である。この南北に走る二列

岩手縣に於ける地的胴体部の地誌學的研究（横田）

間が一つの高原性をもつ。

押角、黒森兩列間を削下した峡谷が小本川で、黒森、遠島兩列間を流れる深谷が安家川である。これ等はいづれも東流して太平洋に注ぐ。山地はいづれも急崖をなして海に臨む。即ち、北部北上高原は山岳重疊し高原面が廣く、いづれも狭い深い峡谷で隔てられている。だから岩手チベットと稱される。換言すれば閉伊川・小本川間の山地押角列は南チベット・小本川・安家川間の山地・黒森・遠島列は北チベット、この三列の西部を結ぶ南北二列の平行列か西チベットと稱する

第三圖



ことが出来る。いづれもチベットの性格を具備するこの地域を、小地理區に區分すると、葛巻地域、小本川地域、閉伊川地域の三つにすることが出来る。

早池峯、藥師二列の南は北部とは全くその趣を異にしている。即ち東端妙澤山を基点として南に尾根が展開し、六角牛（二、二九四米）、五葉山（一、三四一米）に連り、更に西に急轉して生出山（七七一米）、鷹巢山（七九三米）、室根山（八五九米）につながる一大弧をなしている。この弧狀山地が主軸をなして、その内側に擁されているのが遠野盆地である。一方北上川本流に平行して南北に走るものは、藥師岳列の西端高倉山より南部に飛龍山（五九九米）、笠根山（五二二米）、蓬萊山（七八八）東稻山（五九六米）に連なる南北山地である。これを北上西麓列とよぶ。この北上西麓列は折爪・姫神列の延長と見られることも出来る。この南北に走る山地は相當廣い（高さは五百米から千米位、幅は約三十軒ある）高原地域である。この中には遠野盆地を最大として多くの河谷小盆地が分布している。即ち、北上高原は主峯早池峯列を境として北は高原、南は盆地といふ著しい地的個性をもつ。

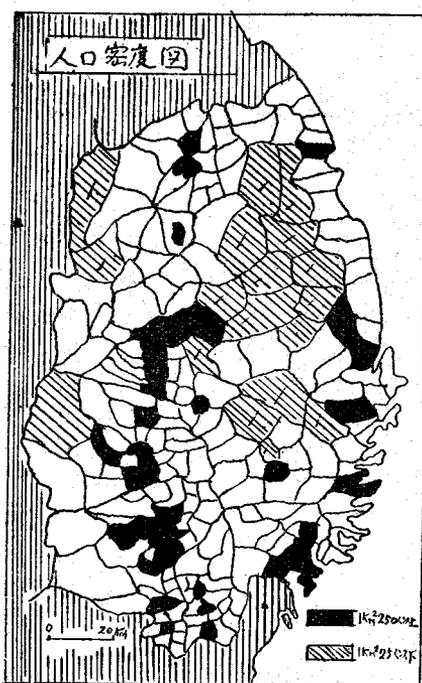
四 地的胴体部の利用

地的構造が以上のようなのであるが、これを如何ように利用しつゝあるが、そしてその價値は如何といふことについて検討を加へる。まづ前提條件として、利用をするのは人間であるから人口に對して一瞥を與へる。

岩手縣の總人口數は百三十四万六千九百十三人（昭和二十五年十月一日センサスによる。）で、その密度は一平方軒に對し八八・四人であ

る。この平均密度より少ない所は、岩手・和貫・上閉伊・下閉伊・九戸・二戸の六郡である。又岩手縣の市町村區劃數は二二七であるが、いまこゝに一平方軒の密度平均の三倍以上の處と平均の三分の一以下の所とを拾つて見ると第一表のようになる。

第四圖



即ち、二五〇人以上が四六。二五人以下が一九となる。これを地理的區分に集計して見ると、一平方軒の平均密度は次のようになる。

北上川低地	一六二人
北上高原	二九人
東部海岸	一〇三人
西部山地	三八人
南部地域	一三一人

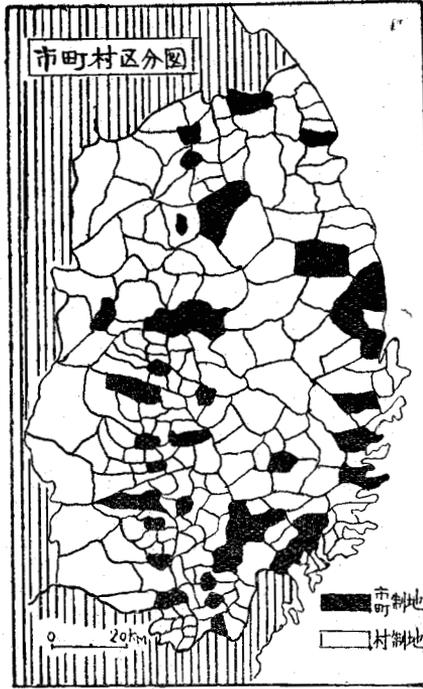
北部地域

七二人

第四圖の密度圖に見るように二百五十人以上の市町村四六ヶ所あるうち三〇ヶ所が北上川低地にあり、二十五人以下の町村一九ヶ所あるうち一五ヶ所が北上高原内にある。この人口密度からも兩者の地的個性を把握することが出来る。

次に利用しつつある現状を見ると第三表・地理區による土地利用百分比に明らかにあらはれている。

第五圖



中央低地は總面積の二一・一%を占め水田地が六〇・二%畑地が三六・三%である。そして全耕地面積の四八・三%を占めているのであるから水田卓越地域である。観点をかへれば、一方籽の密度一六二人といふ人口稠密地域であつて全人口の三五・五%といふ人口集中地域

岩手縣に於ける地的胴体部の地誌學的研究 (横田)

でもある。又行政區域を見ると殆んど同一形態の所に八二の町村制がしかれてあつて、一町村の平均面積が三七方籽といふ僅少さである。以上の要素から多くの改善さるべき事項が発見されるといふのがこの地域の一つの個性と見ることが出来る。

北上山地は總面積の三〇・一%を占め水田地が五・八%、畑地が一三・三%である。これが全耕地面積の九・五%を占めているだけであるから、耕地の稀少地域である。これに反して原野が四五・四%、山林が三一・五%といふ他地域の追隨を許さない個性がある。即ち、山林・原野は全林野面積の三八・五%を占めることになるので、北上高原は林野の卓越地域といふことが出来る。観点をかえれば人口密度は一方籽二九人といふ稀薄さで全人口の九・七%を有するにすぎない。一方行政區域を見ると一村平均一五五方籽の廣さを有するので北上川地域の五倍に當る。然し、人口は八分の一である。この面積の廣大性と人口の稀少性と地貌の山岳性がこの地域の個性である。

以上を綜合して見ると中央低地は多くの勞働力を擁して土地を集約的に耕土化し、耕地に依存せる生活形態を成立せしめてあるのに、北上高原は地貌の自然性から耕土化にはめぐまれません山林・原野の廣大性に依存して自然的生活を営んでいるといふことが出来る。その結果、生産形態に於いて、前者は米作卓越、後者は薪炭卓越となる。これ等の生産形態を支配している第一の要素は自然性であるが、その規範内に於ける經營は地域經濟人側にあるのである。だから利用の鍵を握っているのは、つねに人的構成と活動にあるといふことが出来る。

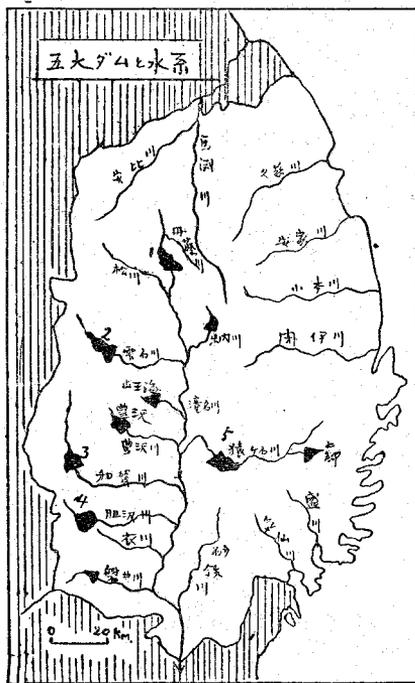
五 地的胴体部の性格

本縣に於ける地的胴体部は二つの全く違つてゐる地的個性から構成されてゐるといふことが出来る。即ち、一は北上川といふ流水性であり、一つは北上高原といふ山岳性である。この二つの明確な地的個性差が一体となつた處に岩手縣のすべてがかけてゐると見ることが出来る。

中央低地帯は往昔よりの交通路となり、各種の利用計劃が漸次進められて住民安住の地となつて來たのである。この土地の構成は氣候の變化と、流水の作用とによつて構造谷を埋積したのであるから、その土地への栽培景が唯一の利用形態を具現してゐる。即ち、第二圖に見るように沖積地が卓越してゐる。この卓越地を開拓すべく北上川をかほつて來た人々の定着が今日の耕土を形成したものであると見ることが出来る。こゝに主なる開拓の先覺者を擧げると次のようである。天平の昔の志波城址も、胆澤城址も、又藤原の文化も皆開拓屯田に密接な關係をもつた根跡であると見ることが出来る。又鹿妻の開拓、松岡奥寺の開拓、千貫石の開拓、壽庵の開拓、照井の開拓等がいづれも北上川右岸ならんで經營されてゐることは史實に明らかである。現在に於いては耕地可能の林野面積が一三%も残されてゐるので開拓のメスカ揮われている。開拓には二つの内容を考へることが出来る。一つは現在耕土化されてゐるものを保護し、之を維持しつゝ増産せんとする消極的面と、荒蕪地を切り開いて耕地の擴張をはからんと

する積極的面との二つである。即ち、北上川の氾濫によつて年々失なわれる耕土人畜の喪失を防ぐ北上川改修事業の完成である。この事業は國家的事業として進行中にあるが、その根本的解決は次の三つの方法以外にないのである。第一は北上地峽部の開墾と流路變更、第二は降水量を計算し、それぞれの地域に於いて流水量を調節する。第三に北上縦谷百米以下等を湖水化して高原乾燥地文化を建設する等である。自然より與へられた豊富な水量をそのまま失ふことは、現經濟人には許されないことである。そこでアメリカのテネッシー谷の權威(T・V・A)には及ばないがこの構想に準じて、各支流にダム

第六圖



を建設し、その水量を一〇〇%利用するといふ第二の方法が採用されつゝある。これが第六圖に示す五大ダムと水系圖である。北上川本流

澁民ダム・雫石川御所ダム・和賀川湯田ダム・胆澤川若柳ダム・猿ヶ石川宮守ダムがそれである。この外に丹藤川外山ダム、瀧名川山王海ダム・豊澤川豊澤ダム・宿内川千貫石ダム・磐井川巖美ダム等が建設の對象となつてゐる。或は衣川遊水池の設計等によつて北上川地峽部の毎秒流量五、五七〇立方米を維持する調節が可能と計算されてゐる。即ちアイオン台風の七、七〇〇秒立方米、カザリン台風の九、二〇〇秒立方米の濁水が押し寄せて多くの被害を與えたのであるが、前記の計畫が實現すれば猛烈な降雨があつても最少限度の被害で岩手の耕土は護られることになる。だから宮城縣に於ける治水事業は何等の變更を必要としない。ひるがえつて、これら支流に貯えられた水量は水力として利用し加工生産に、灌漑用水に、観光休養に、そして又國土美化に、岩手をスイス化する事が出来る。北上川は過去に於いても岩手の文化オアシスであつたが、將來に於いても岩手の文化の主体性を掌握し日本文化の先達性を確保することが出来る。しかし、最早や北上の耕地は疲れてゐる。今に於いて休養と補力を與え利用形態を改變して、過去の傳習より脱脚するの一大革新を施行せざる限り、新しい日本文化の創造に貢献することは出来ない。今日こそ改變の好機に到達してゐると見るものである。

北上高原は長紡錐形態を示して蟠居し、東方洋上より吹きくる暖濕風と、西方よりの寒濕風とを高原の東西兩端に於いて吸収してゐるので、内部は割合乾燥であり、冷涼地域を示してゐる。又高原北部の河川は東流し、南部は西流する河川が卓越する。この實態はブロック運

動の差異性より解説することが出来る。北上高原は秩父古生層であるから久しい間の削磨試鍊を受けた準平原面である。こゝには石灰岩が全面的に、しかも無盡藏に分布する。又、接觸變質した鉄鑛は大橋鑛業所に或は田老鑛業所によつて開發される。或は折爪、姫神山列や北上西麓山列には金鑛が埋藏する。モリブデンもマンガンも、亞炭や耐火粘土にも恵まれてゐる。總じて地下の潜在資源が豊富である。加ふるに起伏の多い表面には千古斧鉞の入りぬ原始林が叢生する。今日利用されてゐるのは運輸可能地附近にすぎない。山林についての個性は廣い草原である。深い谿谷をのぼれば割合廣い高原面がある。よくも「机」といふ地名を附したものと敬服もする。こゝには机部落がある。この豊富な用材と薪炭、草原地への酪農經營がこの地域の性格である。だから北上高原は豊富な潜在資源と合理的に利用しうる山林、原野につつまれてゐるといふことになる。かゝる観点に立てば北上高原は不毛障害の無價値な空間ではなく、科學のメスをまつ有望の資源地域であるといふことになる。この高原が漸く陸化したのは十六億餘年以前のものであるが、漸くその價値を認められて來たのは二十世紀の中頃である。だから二十世紀の後半が開發の黎明期である。その爲には日本全体の在り方を吟味せねばならない。即ち、平和産業の確立、潜在資源の開發、動力源の充實、傳統と陋習の拂拭、衣食住形態の根本的改革等、要は日本人全体の科學水準の向上と國民の一致協力等が根本である。かゝる思想に國民の一致があれば、北上高原の價値はより多く認められること必然である。結局北上高原は提供し得る多くの

文化財をもつていたのであるが、それを利用し得るまでに施策が實行に移されないとはいふことが出来る。だから成因的には古いが利用的にはまだ若いといふことが出来る。この若き高原は地域人の積極性と、交通機關の先行性と、産業開發の樹立性等が壯年性に導く唯一の因子である。

以上を綜合して見ると次のようになる。中央低地は、岩手の文化を培養し、耕土を合理的に永年經營して來たのである。だから耕土は疲勞の極限に達しつゝある。こゝに於いて一大轉換の必要に迫られた時機に到來している。之に反して北上高原は漸く潜在資源開發の曙光をうけ漸く眞價が誕生したに過ぎない。そこで最も新しい國際的科學性を吸狀せんとする状態にある。換言すれば、今日までの價值發揮は中央低地帯であり、今後の活躍は一に北上山地に在るといふことが出来る。即ち、地的胴体部は岩手縣の主導性を握つてゐる性格をもつものである。

六 地的胴体の地理的區分

(一) 中央低地

この地域は南部・中部・北部の三つに區分することが出来る。

1、南部地域

南部地域とは、本縣南端の眞柴丘陵と和賀川に沿ふて南岸を東西に走る鬼柳丘陵間をいふのである。この地域は胆澤文化・平泉文化・或は仙台文化の流れをもち、行政的には水澤縣、磐井縣などの變化を經

て胆澤・江刺・西磐井等の地方事務所と一關市の管轄する大部分である。地形的には、第二圖に示すように西部山地より派生せる(A)鬼柳丘陵、(B)六原丘陵、(C)永岡丘陵、(D)衣川丘陵、(E)平泉丘陵、(F)眞柴丘陵の六つが殆んど平行して東西性をとり、東部はいづれも斷崖をなして北上川に臨む。その丘陵間には、澁川、宿内川、胆澤川、衣川、磐井川の五つがある。この河水はいづれもみごとな扇狀地をつつてゐる。胆澤扇狀地の如きは典型的形態をもつ、一關・前澤・水澤・金ヶ崎・相去等の都市的聚落はいづれも扇央にあり、東北本線がこれを結んでゐる。北上西麓山列を横斷して流れ出る處に立地した城下町が岩谷堂である。即ち、この地域は扇狀地卓越地域であり、歴史的には仙台藩に屬してあつた處である。

2、中部地域

中部地域とは鬼柳丘陵を南端とし盛岡市を北端とする範圍であつて西部の斷層崖下が主体性をもつ、この間には、雫石川、瀧名川、葛丸川、瀨川、豊澤川、和賀川が西より流れ來て埋谷沖積地をつくつてゐる。これは南部地域の丘陵景觀とは異なり均一性をもつ、この地域の南端と北端の距離は約五五籽で、高度差は約百米、谷幅は廣いところでは二十籽、狭いところで十籽あるといふ縦谷平坦地である。斷層崖下にはホルトベンチが並び山麓には原野が連なる。各河水は、用水池、灌漑用水路の完成等によつて水田が卓越してゐるので南部地域の扇狀水田地域と共に岩手の穀倉地帯である。北上川が航水路として利用されてあつた頃には河港として立地した、黒澤尻・花巻・石鳥谷・日詰等は

現在に於いても地方的中心集落である。これを東北本線が結ぶ。中部地域は藩政時代には南部氏に属してあつたので家屋形態も南部曲屋の特相を示しているし、この地一帯は南部氏の穀倉地域でもあつたのである。(曲屋の分布圖は本誌第一卷九十一頁にある)

3、北部地域

北部地域とは盛岡市の北・瀧澤峡谷より七時雨火山横列までの間である。西部は送仙斷崖と鬼越斷崖とによつてへだてられた地域であるが、大部分は岩手火山の噴出物によつて覆われて緩傾斜をなす裾野草原地帯であり、東部は二十度の傾斜をもつモナードノツク姫神山列である。名稱姫神にふさわしく山麓は白樺と鈴蘭につままれる女性的な自然であり、之に配するに毅然とたつコニーデ岩手山は長い裾野を引き草原に南部駒が嘶く男性的な景觀は好對象である。この詩情をそゝる自然をふるさととしたのが詩人石川啄木である。この地一帯は畑地が卓地し岩手甘藍が沼宮内を中心に移出される。

以上のように中央低地は三つに區分されるが全域としては全人口の四六%約六十万の住民が、耕地五〇%を経営し、尙九万余町歩の原野が残されてある。これが現在開拓の對象となつてゐる。最早やこの地域はこのまゝでは供給地域或は背後地域とはなり得ない。なぜなら現在日本が國際的に展開せんと全面的國土開發の構想に動きつゝあるときに於いて、この中央低地が日本の視野の上にたつて利用されねばならないからである。

(二) 北上高原

岩手縣に於ける地的胴体部の地誌學的研究 (横田)

この地域は、遠野盆地地域、閉伊川地域、小本川地域、葛巻地域の四つに區分することが出来る。

1、遠野盆地地域

一大弧をなす北上高原の主脈にいだかれてゐるのが遠野盆地である。中央低地との間には北上西麓山列の南北に走る約三十軒にも及ぶ幅の廣い高原面がある。この盆地は地形的に二つにわけられる。即ち中心部は遠野町を中心として、綾織、松崎、土淵、青笹の四ヶ村約二七〇方軒で二方三千余の人口が居る。その外廓として宮守、小友、鱒澤、達會部、附馬牛、上郷の六ヶ村と早池峯南麓の内川目・外川目の二ヶ村も一應この縁邊漸移地域として、この範圍の中に含めると約一、〇〇〇方軒で一方軒約五〇人の密度となる。

花巻驛を始發する宮古行列車は、北上西麓山列に属する矢澤の丘陵を越えれば高原盆地土澤驛(安俵盆地)につく、こゝより猿ヶ石川に沿ふて、岩根橋、田瀬、河内の峡谷をすぎれば遠野盆地である。この盆地は小島瀬川(山田線川井部落に通ずる小國街道に沿うてゐる河川)・河内川(鶴住居に通ずる難所笛吹峠)八六二米を越える釜石行バス道路に沿うてゐる河川)・猫川(大橋鑛業所元山に出る道路に沿うてゐる河川)・早瀬川(釜石市に通ずる難所仙人峠八八七米を越える縣道と釜石線に沿うてゐる河川)・小友川(江刺郡人首ヒトカベをへて世田米、高田、岩谷堂、水澤に通ずる道路に沿うてゐる河川)等を培養する猿ヶ石川の堆積盆地である。この盆地の中央部に南方より突出した物見山(九一七、一米の北麓鍋倉山(三四三、九米)麓に城廓を築いたのが

阿曾沼（淺沼氏にもつくる）である。其の後鱒澤氏・南部氏の城下町として中心的消費地を成立せしめたのであるが、其の後釜石、高田、盛等の沿海地域と盛岡、花巻、水澤、岩谷堂等の中央低地帯と早池峯山麓、閉伊川地域との交通上の要所を占める位置に當るので宿場町として繁盛を極め一日市町（市日の中心通り）の如きは其の名残りである。昭和二十五年十月十日釜石、花巻を結ぶ鐵路が完成するや宿場町には終止符をうち立地の主体性は原料素材の中繼商業より重工業・輕工業の生産加工業に轉化せねばならぬ實情になつたのである。換言すれば遠野盆地の中心集落遠野町は、城下町として誕生し、交易宿場の消費地として成長し、生産加工の産業都市として永遠性をもつ（予察）といふ三轉の過程を経たことを把握するものである。

2. 閉伊川地域

閉伊川地域といふのは、閉伊川斷崖谷に沿ふ門馬・川井・小國・茂市・刈屋の五ヶ村地域と、それに接續する類似地域の築川、金澤の二ヶ村を含めた約一、〇〇〇方籽、一方籽の人口密度は二八人である。この地域は一、五〇〇町歩の山林と三、六〇〇町歩の原野が個性的である。

閉伊川に沿ふて盛岡、宮古間の縣道があり山田線が走る。閉伊川の景色から盛山溪（盛岡山田間の意）といったが、カザリン台風の暴威によつて平津戸、茂市間は不通となつて居る。

この間は私設の自動車會社によつてバスの連絡がつけられて居るが花巻、釜石、宮古のコースをとる人が多い、この地開發のためには山

田線復活を近い將來に必ず實現させべきものである。

3. 小本川地域

小本川地域といふのは、小本川の深い谷を中央にしている、小川村、大川村、岩泉町、有藝村、小本村の五ヶ村とこれに接續する、安家村、普代村、田野畑村、田老町の四町村と西部を劃する川口村、蘆川村の大部分を含めた一、三〇〇余方籽で一方籽の人口密度二二人の地域である。この地域の自然景・文化景は殆んど閉伊川地域に類似する。この地域は山林の二万町歩、原野の七千町歩が卓越し豊富な地下資源を有するが、水田が極少であるといふことが性格づけて居る。又、山岳重疊の高原性・人口の稀薄性、潜在資源の豊富性、運輸機關の不足性、隔絶性と孤立性、産業形態の特殊性などの事實が個性的である。だから岩手チベットと呼ばれる。

小本川を中心として南部を、南チベット、北部を、北チベット、西部を西チベットと區分することも出来る。この地域への開發のメスは、茂市より押角峠を越えて小本川流域に顔を出した小本線、それ以外は次のバスの運行網である、岩泉小本間、小本宮古間、岩泉、葛巻間、北チベットへの開發は久慈線の兩進、小本線宇津野驛よりの北進とか動脈となる。原野七千余町歩の經營は本縣酪農政策の對象となりつゝある。先鞭をつけられた、森永、守口・明治等の資本家のよりよい充實と發展とに寄與し、協力して開發の充實を圖るべきである。

4. 葛巻地域

葛巻といふのは、葛巻町、江刈村と北チベット地域に接續する山

根、山形二ヶ村を含めた四、〇〇〇方秆の廣さとその中に住む一方秆の人口密度三〇人の地域である。この地は四行政区とも經營形態を異にしているが、それは山岳の重疊性、峽谷性、高原性の類似的自然性に對する、地域人の經營差によるものである。

馬淵川上流の葛卷、江刈兩村は守口酪農經營に現金收入を依存し薪炭が主体性をなす。

久慈川上流の山形村は多くの峽谷にわかれ川井、來内、荷輕部、日野澤、戸呂町、小國、繫、霜畑などいづれも仙境ともいふべき所で、山林、原野につまれば稗が卓越する。

長内川の灌域が山根村で本縣に於ける水田皆無村である。このことが山根村を性格づける。上戸鎮、細野、木賣内、端神、深田等は山峽の部落で稗を常食とする山の地である。

葛卷地域は北上高原の本幹をなすS字形主脈の北麓と、北部支脈種市山列との間に位置せるもので、四、〇〇〇方秆の廣さを有するが、耕地極めて少なくその五倍が山林、三倍が原野であるから、この地域も山林原野卓越地域ということが出来る。徒つて生産形態も自らこれによつて支配される。即ち、耕地に八倍する林野面積によつて運命づけられている。これ等の資源開發の爲に省營バスが葛卷、久慈間、久慈、普代間が運行しているが山根村だけはその沿線からは遠い。たゞトラツクがあのみである。

こゝに北上高原地域をまとめて見ると遠野盆地は水田米作が卓越し、閉伊、小本、葛卷三地域は山林原野が卓越し潜在の地下資源が豊

富である。南部は米食し北部は稗食を普通とする。南部は盆地的、小企業的、交易的生産形態であるに對し、北部は昔ながらの自給經營である。近時漸く、國家的、舉縣的に綜合開發が着手されつゝある。即ち、最も新しい構想のもとに、大規模に生産加工業が立地せられつつあることは、この地の面目に一大改變を與へるものである。然し北上高原地域は人口稀薄地であり、幼稚な文化地域であり、自然依存の經濟形態であることは、こゝ暫く續くものと見られる。

七 結 語

岩手縣に於ける地的胴体部は、性格を異にする北上川本流灌域、北上高原地域である。この自然的性格の差は人口密度に於いて前者は一六二人、後者に於いて二九人の差を生じ、これが土地利用に直接影響して耕地面積の差四八・三%と九・五%となる。然し、林野面積に於いて一三・二%と三八・五%となる。即ち、一は河川を主とし河川の營力に依存して文化オアシスを現出して岩手の生産的寶庫たらしめ、一は高原性、林野性の廣大と地下資源への綜合開發性とが曙光に浴し始めたのである。

換言すれば一は土地利用の極限に達し回春を必要とする黄昏期であるに反し、一は漸く希望をもつて事業の經營に最も新しい科學力を綜合的に驅使せんとする黎明期のものであるといふことも出来る。

日本國の日本的個性は、島國であるといふこと、僅か三七万余方秆の狭少國であることと八千余万といふ豊富な人口を有すること、

耕地面積少く、しかもその地力は使用極限に達していること、加ふるに天災地變が多いことなどが挙げられる。新生日本の行くべき道はたゞ一つ「地的個性の回春をはかり海に依存し、海の彼方にヒンターランドを求むることである」日本は海の彼方にヒンターランドを求めない限り永遠的發展は不可能に近い。我が岩手縣も又日本の繁榮策に對し負担を荷ふべきである。即ち、海を巧みに利用することが將來性を把握する鍵である。岩手の海岸線は三百二十軒もあり、良港灣が連続する。まさに三陸工業地帯設置の自然的好條件を具備している。然るとき北上高原の利用價值は倍加する、そのとき疲労し切つた中央低地は決して三陸工業地帯の培養空間にはなり得ないし、勿論背後でもない。即ち、岩手縣の地的胴体部を占める北上川と北上高原は山河一帯となつて三陸工業地帯に結びつくべきである。然し現實的に之を實現するには國家的に飛躍した施策が必要である。

現在に於ける、岩手縣の地的胴体部を地誌學的にながめ個性を把握して來たのであるが、岩手縣は胴体部の自然が規定した範圍内に於いて單に自然のみを經營して生活しているといふことが出来る。即ち、北上高原と北上川に支配され、且つ、それに運命づけられていといふことが出来る。極言するなら自然の利用でなく、自然に支配されていといふことになる。

参考文献

田山 利三郎 北上山地の地形
田邊 健一 北上山地内部の谷底堆積狀況

東北大學藏
東北地理一ノ二

齋藤文雄	北上高原西縁の第三紀層	地學雜誌四六二號
辻村太郎	東北日本の斷層盆地—陸中斷層系	地評八ノ九、一〇ノ一一
井上春雄	北上山地切崖面	大塚論文 一卷
村田貞藏	扇狀地形態に關する理論的研究	地評三ノ一二
〃	膽澤扇狀地の形態學的研究	地評一五ノ二
〃	膽澤の景觀に關する若干の記録	地評一七ノ五
山口彌一郎	陸中膽澤扇狀地に於ける散居と其の生活	地評六ノ七
高橋純一	北上阿武隈兩河上流區の流水率	地理學五ノ四
田中節秀三	地理學上より見たる東北地方の開拓	東北地理一ノ一
山口彌一郎	北上川流域の開拓	地理學五ノ一、二、三
渡邊万次郎	東北地方の鐵業資源	地理教育二七ノ一、二、三
〃	北上山地に於ける山村生活	地理學五ノ一、二
〃	岩手縣に於ける東西性と南北性	地理教育二七ノ一、二、三
〃	岩手縣に於ける地域研究法	岩手大學學藝學部年報第一卷
〃	岩手縣の地誌的考察	東京郷土教育二三號
〃	岩手縣の地誌的考察	地理と歴史 六ノ一二、七、一
〃	早池峯山の地形學的考察	早池峯文化協會第一號
〃	岩手縣の地誌的考察	岩手縣教育會
〃	岩手縣新誌	日本書院

第一表 各市町村人口密度表

1	沼宮内町	三、二八一	6	花巻町	九三三人
2	黒澤尻町	二、〇〇二	7	盛町	八九六
3	水澤町	一、五七七	8	釜石市	七六八
4	福岡町	一、三九三	9	高田町	六四六
5	日詰町	九七八	10	一戸町	六一八
一平方料二五〇人以上の市町村					

9	8	7	6	5	4	3	2	1		28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
築川村	小國村	附馬牛村	金澤村(上閉伊郡)	有藝村	大川村	門馬村	安家村	藪川村	一平方軒二十五人以下の村	末崎村	氣仙町	二子村	大迫町	眞城村	岩谷堂町	一關市	小友村(氣仙郡)	白山村	大船渡町	見前村	千鹿町	江釣子村	愛宕村	遠野町	盛岡市	廣田村	久慈町
一八〃	一七〃	一六〃	一五〃	一四〃	一三〃	一〇〃	九〃	四人		三六五	三六八	三六八	三八四	三九三	三九四	三九四	四一〇	四三三	四四五	四四七	四五六	四五八	四八九	五三七	五四二	五五〇	五七三
18	17	16	15	14	13	12	11	10		46	45	44	43	24	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29
西山村	松崎村	御明神村	江刈村	澤内村	山形村	川井村	刈屋村	山村田		更木村	太田村	八幡村	米崎村	赤石村	石切所村	古城村	山田町	涌津村	鬼柳村	宮古市	徳田村	佐倉河村	姉体村	南都田村	古館村	前澤町	羽田村
二五、三〃	二五人	二四〃	二四〃	二三〃	二三〃	二二〃	二二〃	二〇人		二五三	二五七	二六一	二九四	二九四	二九七	二九八	二九九	三〇〇	三〇六	三〇七	三一七	三一七	三二九	三三三	三三八	三四三	三五五

岩手縣に於ける地的胴体部の地誌學的研究 (横田)

第二表 岩手縣各郡市面積人口表

昭和二十五年十月一日國勢調査による

郡市名	面積 Km ²	人口 人	密度 1Km ²
1 盛岡市	219.80	117,607	542.0
2 釜石市	46.30	35,331	738.1
3 宮古市	127.89	39,255	306.6
4 一關市	91.46	36,269	394.2
1 岩手郡	2,474.06	119,724	48.3
2 紫波郡	397.46	58,981	148.2
3 稗貫郡	688.24	80,007	116.1
4 和賀郡	1,183.30	100,436	84.8
5 膽澤郡	761.25	97,475	128.1
6 江刺郡	443.76	60,718	136.7
7 西磐井郡	466.65	44,848	96.0
8 東磐井郡	799.76	104,790	130.9
9 氣仙郡	952.74	91,030	95.5
10 上閉伊郡	1,346.80	91,762	68.1
11 下閉伊郡	2,615.93	94,582	36.1
12 九戸郡	1,391.83	94,188	67.6
13 二戸郡	1,225.07	79,911	65.2
計	15,235.31	1,346,913	88.4

19 山根村 二五、八〃

第三表 地理區による土地利用百分比表

地理區名	小區分	行政區	一行政區		面積比	田地	畑地	山林	原野	耕地面積	林野面積
			面積	人口密度							
			Km ²	人	%	%	%	%	%	%	%
中央低地	3	82	37	162	21.1	60.2	36.3	13.1	13.3	48.3	13.2
北上高原	4	31	155	29	30.1	5.8	13.3	31.5	45.4	9.5	38.5
東部海岸	3	50	57	103	19.6	5.8	16.2	22.6	14.1	11.0	18.3
西部山地	1	15	184	38	19.1	13.4	6.9	5.3	6.4	10.1	5.9
南部地域	1	28	31	131	5.8	10.5	9.8	10.4	3.2	10.2	6.8
北部地域	2	21	25	72	4.2	4.3	17.5	17.1	17.6	10.9	17.3
計	14	227	85	89	100	100	100	100	100	100	100

第四表 小地理區による土地分類比較表

大區分	小區分	面積	人口	密度	田地	畑地	山林	原野
中央低地	1. 北部	535.70	44,181	82.4	23,016	50,054	65,800	24,450
	2. 中部	1,553.76	311,820	200.0	217,051	183,318	107,420	41,571
	3. 南部	3,051.24	554,542	156.3	372,128	372,128	268,465	93,967
北上高原地域	1. 遠野盆地	1,048.08	48,567	46.3	32,534	31,641	109,458	98,260
	2. 閉伊川地域	1,064.23	22,308	20.9	7,919	12,678	150,182	35,524
	3. 小本川地域	1,308.90	27,090	20.7	2,854	23,866	187,276	71,478
	4. 葛巻地域	779.70	20,059	25.7	2,179	18,053	202,021	113,425